京都エコツーリズム実践交流会調査報告書

京都市におけるエコツーリズム推進のために

平成 14 年 9 月 20 日

玉井敦之

はじめに

この提案は、これまでのマスツーリズム型観光で無く、現在京都市内各地で行われている地域をじっくり味わう**地域資源やそれを活かした活動**と**観光**をつなげていくにはどうしたらいいかという思いから提案するものである。エコツーリズムの理念をベースに、その１つの具現化であるエコツアーに焦点を置きながら模索を行っている。

今年２月より、京都エコツーリズム実践交流会プロジェクトを行ってきた。約半年かけて、１９団体のプログラムに参加した結果、それぞれのプログラムの魅力と、活動における課題が見えてきた。

現状の課題を解決していくには、個別の団体ですべて解決しようとすると、多大な労力と時間と想いを要する。そこで、アジェンダ２１フォーラムとしてサポートできるだろう点、各団体がそれぞれに課題とするものの解決策となりえそうなことを考えてみた。

この報告書で述べることに取り組んでいくためには、多くの方の力を借りなければならない。これまで全くほとんどつながっていなかった地域資源やそれを活かした活動と観光をつないでいくには、多くの人の合意形成が必要である。まず、観光業界の人たちには地域活動を体験する機会をもってもらう必要があるだろう。また、地域活動を行っている人たちには、観光について少しずつでも知ってもらう機会を持つ必要があるのではないだろうか。

実はつながった方がよりよいものが生まれると思われる地域資源やそれを活かした活動と観光を上手くつなぎ多くの人とその思いが共有できたとき、少しずつだが思いを形にできるようになる。今回の報告書が少しでも、多くの方の思いを一つにするきっかけになれば幸いである。

１　現状と可能性

これまでの観光は、大型移動手段を用いてスポットをどれだけ周れるかということに重点を置いたものであった。この形態の旅においては、団体を引率する添乗員の役割は主に旅の行程管理、時間管理である。

近年では、団体旅行よりも、個人旅行など少人数での旅が好まれてきている。その理由としては、団体旅行では旅先での行動は管理され、自由にじっくりその地を味わうことは難しい。反面、個人旅行でなど少人数の旅あれば、時間や行程にも融通が利き、旅先をじっくり味わうことができる。

このように観光客が旅先をじっくり味わうというニーズをもったときに、京都市内各地で行われている地域資源を活かした活動に参加することはそのニーズを満たすことができるのではないだろうか。

しかし、現状ではそのような地域活動の情報はほとんど市民向けへの PR のみで、観光客への PR はうたれていない。

そこで、今回京都市のエコツーリズム推進のための土台となるであろう、地域資源を活かした活動を行っている団体、個人の現状を把握するための調査を行った。以下の章にて、調査結果、課題、改善点を報告する。

２　調査内容

２－１　調査の趣旨

昨年 6 月に実施したエコツーリズムに関するアンケート調査結果より、地域の魅力・京都文化の魅力を活かした活動を実施されている団体の中から、約３０団体を京都エコツーリズム実践団体として選出した。各地域活動団体がとのような活動が行っているのかを当交流会を通じ、京都エコツーリズム実践団体がそれぞれにもっている魅力と、活動運営上における課題を浮き彫りにする。

２－２　調査概要

調査対象：京都市エコツーリズム実践団体　１９組

内容：各団体の活動に参加し、プログラム（ツアー）体験、及び、ヒアリングを行った。

参考資料：調査用紙（京都エコツアー企画シート）

３　結果報告

３－１　京都エコツアー実践団体について

訪問した活動は、以下の 4 つのテーマに分類することができる。この分類は、昨年

実施したアンケートでの分類にしたがったものである。

・京都の自然に親しむプログラム（ツアー）　8 件
・京都を歩いて文化を知るプログラム（ツアー）　6 件
・京のエコ生活文化にふれるプログラム（ツアー）　2 件
・京の環境対策を学ぶプログラム（ツアー）　3 件

テーマ別の調査対象団体一覧、参加したプログラムの概要を別途提示する（資料１参照）。

３－２　プログラム（ツアー）に見られら京都の資源・魅力

以下では、まず各団体のプログラム（ツアー）がどのような人を対象に、どんな手法を用いてどのような魅力を伝えているのかを見てきたままに述べていく。その後、記述で分類したテーマごとにプログラムの傾向を述べていく。

３－２－１　京都の自然に親しむプログラム（ツアー）

（有）ビッグスマイル

概要：保津川でのラフティングを通して、保津峡の自然とふれあい、参加者の人たちとのふれあいを大切にしたプログラムである。
対象：中学生以上の健康な方。（当日は、20 代女性 2 人）
手法：インストラクターがついてゴムボートで川下りをする。
魅力：保津峡の風景やトロッコ列車を見ながら川下りそのもの体験し、途中で、泳いだり、飛び込んだりと楽しめること。

フィールド・ソサイエティー

概要：八丁平の森歩きを通して、東山とは違う北山の奥深い自然に触れることができる活動である。
対象：特に限定はしていない。（小学生から熟年の方まで年齢層は広かった。）
手法：数人の自然に詳しいスタッフがついて、所々参加者の興味に応じて解説する。
魅力：普段なかなか行けない京都郊外の自然にふれられること。

イヤーゲームの会

概要：大原野で野草を摘んで料理をしたり、竹で食器を作ったりして、身近な自然に親しむ活動である。
対象：特に限定はしていない。（家族、熟年の方、若い方、様々だった。）
手法：大原野に住んでいる地元人とスタッフの解説を聞きながら､野草摘みが行える。また、地元の人から竹のお箸や器の作り方を習う。自分たちで採ったものと、作ったものを用いて食を味わう。
魅力：地元の人と一緒に野草摘みをして料理をしたり、竹で食器を作ったり、自然と親しみ、人とも交流できること。

使い捨て時代を考える会

概要：野草摘みをしたり、無農薬の餌による養鶏方法の現場を見たりすることで、食の安全性を日常生活でも深く認識し、日々の買い物においてグリーンコンシューマーになるきっかけづくりの活動である。

対象：特に限定はしていない。上記の活動に興味のある方（熟年層の方が多かった。）

手法：スタッフの方が解説しながら、野草摘みをして料理をしたり、無農薬の餌による養鶏方法の現場を見たりする

魅力：自然界から実際に食料を調達してみたり、食べ物が自分たちの手元に来る前の生産現場を見ることで食の大切さに気づくこと。

北青少年活動センター　森の冒険団

概要：親子で、様々な仕掛けのある船岡山の探検を通じて、船岡山を深く知り、五感を使って自然を楽しむ活動である。

対象：幼稚園年長～小学校低学年とその保護者

手法：スタッフが各所に船岡山の自然を五感を使って子どもの視点で楽しめるような仕掛を用意しておいて、グループごとにポイントを回って船岡山を探検する。

魅力：親子で船岡山の自然を五感を使って楽しめるプログラムであること。

ネイチュア・フィーリングの会

概要：健常者の人も、障害を持っておられる人も、変わりなく一緒に身近な自然を通して、自然の不思議さや楽しさを感じることのできる活動である。

対象：特に限定はしていない。（視覚障害者の方、難聴の方、健常者の方などさまざまでした。）

手法：スタッフのさりげない誘導により、植物や昆虫をじっくり見たり、匂ったり、触ったりと五感を使いながら自然観察をする。

魅力：障害を持っておられる方も健常者の方も五感を使って一緒に自然と親しめること。

京都野鳥の会

概要：野鳥や彼らが生活する環境のことについて知り、野鳥の住める自然の生態系を保護・保全していくべく、桂坂野鳥園での観察会を行っている。

対象：特に限定はしていない。（熟年層の方が多かった。）

手法：山道を静かに歩きながら、スタッフの誘導により新緑の緑の中に潜む鳥の鳴き声を聞き分けながら、どんな鳥たちがいるのか確かめながら歩く。

魅力：野鳥について、スタッフの方がは見分け方、特徴等を教えてくれること。

京都みどりクラブ

概要：ノーマライゼーションの理念を下、花の持つ“癒し”と“人のふれあい”を大切にした花のまちづくりとして、植物を育てることに興味がある人々で（障害

のある人もない人も一緒に）梅小路公園の一角の花壇のプランニング、維持管理をする活動である。

対象：植物を育てることに興味がある方（障害をもっている方、持っていない方様々であった。主婦の方が多かった。中には熟年の男性もいた。）

手法：花壇作りを協力して行う。（それぞれが自分のペースで関わることができる。）

魅力：花の持つ“癒し”と“人のふれあい”を伝えること

京都の自然に親しむプログラム（ツアー）の傾向

このプログラム（ツアー）は全体として、「見る、聞く」といった感覚だけでなく、「触る、匂う、味わう」といった五感にうったえる活動が多い。知識を高めるというよりもどちらかというと体験そのものに重点をおいている。体験そのものに重点をおいているため、体験行為が効果的に行われるようにするため、様々な仕掛けが用意されてることが多い。小道具、資料、効果的な言葉かけなど。参加者の関心に応じて対応している様子がうかがえた。プログラムを行っているフィールドの全体的な自然生態系そのものに触れることは少なかった。各フィールド独自のポテンシャルを活かしたプログラムが実施できるようになれば理想的である。

３－２－２　京都を歩いて文化を知るプログラム（ツアー）

京都・路地・散歩隊

概要：都市化や開発で京都らしい町並みやコミュニティーが失われていくなか、市井の人々の生活が息づくスポットを歩き、昔ながらの京都の魅力を体験することで、身近な京都の良さを再発見する活動である。

対象：特に限定はしていない。（青年層が多かった。）

手法：1 日目は 2 つのグループに分かれ、堀川商店街と古川町商店街で商店主さんに歩いて商店街のこれまでの様子や思っていることを聞きながら歩いて回った。夜は、お寺に泊まり、座禅体験と精進料理をいただいた。
2 日目は前日に知った情報を下に模造紙で商店街マップを作って発表した。

魅力：スタッフ、参加者が一緒になって、訪問する場所の人とふれあいながら、人の生の声から、地域の魅力を知っていけること。

Walk in Kyoto Talk in English

概要：外国人が京都及び、日本について理解できることを目的としたツアーである。

対象：英語のわかる外国人（日本人も可）

手法：京都駅から西本願寺、東山五条辺りまでの裏道を歩きながら、ポイントごとで仏教、神道、和菓子、伝統産業、今の町の現状などをたまに小道具なども使用しながら解説してくれる。

魅力：日本文化の土台やその中で、築かれてきたものについてわかりやすい英語で解説してもらえること。

京都散策愛好会

概要：伏見の史跡と酒蔵めぐりを通して、伏見の街の良さを再発見する。

対象：特に限定はしていない。（熟年層が多かった。）

手法：ポイントを回りながら、地元出身のガイドの方がポイントごとの詳しい解説をしてくれる。

魅力：史跡や酒蔵を巡りながら、個人ではなかなか詳しく知ることができない伏見の歴史を知ることができること。

宇多野ユースホステル

概要：祇園祭を支え続けてきた鉾町の方からお話を伺い、今まで外からみていた祇園祭のほんの少し内側を覗かせてもらうことで、京都の生活・文化について参加者の人みんなと考える。

対象：中学生以上の個人（学生、中高年の方が多かった）

手法：初めにワークショップ形式で、参加者お互いの自己紹介、それぞれの祇園祭感を出し合いました。その後講師の方からお話を聞きました

魅力：講師の方からの貴重なお話だけでなく、参加者同志の交流も大切なテーマとしていること。

京都史跡ガイドボランティア協会

概要：京都に残る史跡を調査・研究し、その成果を市民や観光客の皆さんに伝えることで、史跡保存・観光都市京都の再生に役立てる。

対象：特に限定はしていない。（ほとんど熟年層の方だった。）

手法：１つのグループを 20 名ずつくらいに分けて、それぞれのグループに解説するスタッフと安全管理のためのスタッフがつく。解説者はポイントごとで資料を使いながら解説する。

魅力：個人ではなかなか詳しく知ることができない史跡に関する歴史を知ることができること。

京都新風友の会

概要：歴史ウォーキングを通して、日本人の起源を知っていく。今回は祇園祭の奥深さを知る。

対象：特に限定はしていない。（ほとんど熟年層の方だった。）

手法：瀬戸先生が設定したポイントをその都度、資料にしたがって説明してくれる。

魅力：瀬戸先生の研究成果を下に、奥深い歴史の事柄を知ることができる。

京都を歩いて文化を知るプログラム（ツアー）の傾向

　このプログラム（ツアー）は全体として既述のテーマのプログラムに比べて、知識の提供に重点をおいている傾向がある。コース上に設定されたポイントごとで、ガイドがそれぞれのポイントにちなんだ事柄を解説する。主催者側は知識の提供に重点をおいているため、参加者側も解説内容を聞いてわかるだけのある程度の前知識は必要

だと思われる。参加者を見てみると熟年層が多く、なかなか知ることができない知識を習得しようという姿勢がうかがえた。

しかし、小・中学生などを対象に行う場合には、主催者側からだけの情報の提供だけではなく、所々興味を引く仕掛けづくりが必要ではないだろうか。史跡や名所を回る際、教科書に書いているような歴史的な事実を述べるだけでは物足りない。過去、どのような経緯でその場に建てられ、地域の人々にとってそれがどのようなものなのかを聞かせてもらえるとその土地独自の魅力がより見えてくるのではないだろうか。

３－２－３　京のエコ生活文化にふれるプログラム（ツアー）

ふろしき研究会

概要：昔は良く使われていたふろしきについて、その利用法と文化を引き継ぎ、上手に利用するこつを伝える。何点かのふろしきの包み方（利用法）を習得して、日常でも使ってもらえるとよい。今回習われた方が、他の場所で普及してくれればなおよい。

対象：特に限定はしていない。（若い方から熟年の方まで様々）

手法：講師の方が日常でも使える何点かのふろしきの包み方（利用法）を教えてくれる。

魅力：一枚のふろしきが様々な用途に使えることを学ぶことができ、すぐに日常に活かせる。

イーフ２１の会京都支部

概要：楽しい食材の有効利用講座を通して、身近な所から環境問題を考える機会を作り、広く世界的な地球環境の保全に目を向ける啓発運動を行うこと。

対象：特に限定はしていない（主に会員の方）

手法：講師の方が食材の有効利用をした料理を教えてくれる。

魅力：すぐに日常の料理作りに活かせる食材の調理法を習得することができる。

京のエコ生活文化にふれるプログラム（ツアー）の傾向

訪問させていただいたプログラムは二つであったが、どのプログラムにも増して、日常で活かせるものを学ぶことができた。文化や食といったものを身近な所から見直すきっかけになる体験であった。日常に活かせるという点が楽しさをかきたてているように思われる。

３－２－４　京の環境対策を学ぶプログラム（ツアー）

ヨードクリーン

概要：循環型社会の基本システム、ごみと資源の違いを学ぶ。

対象：企業研修、修学旅行生

手法：解説をしてもらいながら、工場で製品の生産過程を見る。

魅力:企業での取り組みの現場を見ながら資源の有効利用について学ぶことができる。

島津製作所（本社）

概要：島津製作所の施設見学を通して環境マネジメントを学ぶ。
対象：企業研修、学生
手法：島津製作所のこれまでの取り組みから、環境マネジメントの講義をしたり、施設の設備の説明をしたりする。
魅力：世界を代表する企業の環境への取り組みを学ぶことができる。

島津製作所（博物館）

概要：近代日本の科学技術の発祥の地が京都にあったことと、日本の近代技術の発展過程、パイオニア精神と人生哲学を理解してもらう。
対象：特に限定はしていない
手法：展示物の解説を行う。
魅力：世界を代表する企業の先進的な取り組みについて知ることができる。

環境カウンセラーズ京都

概要：企業の環境対策を実際に見てみることによりから、身のまわりの現状を知り、考える機会をもってもらう。
対象：特に限定はしていない。（ほとんどが会員の環境カウンセラーの方だった）
手法：解説をしてもらいながら、工場で製品の生産過程を見る
魅力：企業の環境への取り組みを学ぶことができる

京の環境対策を学ぶプログラム（ツアー）の傾向

企業の施設見学を通じて、環境対策に関する実際の取組みを知ることができる。解説をしてもらいながら事業者の資源の有効利用やその他の取組みを具体的に知ることができ、自分には何ができるか考えるきっかけの体験になると思われる。。

３－３　全体的なプログラム（ツアー）の傾向

上記のようにどのプログラム（ツアー）もそれぞれに魅力があった。体験を重視したもの、知識の提供を重視したもの、日常に活かすことができることを学べるもの、事業者の環境対策を学ぶことができるものなどであった。

また、それぞれにもっと魅力的なものになる可能性を感じた。どのプラグラム（ツアー）もスタッフとして関わっている人が、素材（自然、史跡、文化、事業、人など）のもっている魅力を引き出しながら行っている活動である。素材の魅力をわかりやすく効果的に伝えるには、小道具を用いたり、気の利いたトークや仕掛けするなどいろいろな手法がある。上記の活動ももっとアイディアを出せばもっと楽しいものになる。また、どのプログラム（ツアー）においてももっと地域と人にこだわることで、より奥深い京都の魅力を発掘し、伝えられるようになると思われる。

３－４　現状における全体的な課題

以下では、上記のような京都の新しいエコロジカルな魅力づくりを実施されている団体へのヒアリング調査から出てきた課題を述べることにする。

今回訪問させていただいた団体へ対して、団体の組織運営上の課題を聴いた。以下共通すると思われる課題をそれぞれまとめて件数の多い順に書いておく。

- （若い世代の）人材確保　８件
- 広報ルートの拡大　８件
- 採算の合うプログラム実施　７件
- 活動資金の調達　１件
- 生き物の住める環境整備　１件
- 見学ルートの設置　１件
- 小学生に対する環境教育の実施　１件

上記のように、団体運営に関する人材確保、プログラムの広報、採算の合うプログラムの実施の３つの項目に関する課題が顕著に表れている。数字を見てわかるように、団体によっては複合的に課題が存在することがわかる。

上記の数値についてヒアリングの結果から述べていくと、人材確保に関しての課題は、組織の運営スタッフそのものが不足している場合、登録メンバーは多いがプログラム当日のスタッフが不足する場合、活動運営のための後継者の不在など人材養成に関するものである。

プログラムの広報に関しての課題は、多くの団体が実施している活動がまだ納得のいく形でターゲットとする人々に届けられていないようである。多くの場合、広報手段として取られているのは新聞掲載、チラシ、会員へのダイレクトメールである。効果的な広報ルートを確保することが求められている。

採算の合うプログラムの実施に関しての課題は、上記の団体の行っているプログラム（ツアー）は、団体によって自主的なボランティア活動、生業として行っていこうとしているなど形態の違いはあるが、２－１で提示した資料１を見るように低価格で実施している場合がほとんどである。聞き取りの結果、参加費による収益は多くの場合、広報物作成費、案内発送の通信費、講師依頼費などに充当される。活動の経費をまかなった後、事業に再投資するだけの運営資金を十分に確保できている団体は少ない。活動の形態、規模によって金額は異なってくるが上記に述べた人材養成や広報ルートの拡大を考えると運転資金の確保は必ず必要になる。

このように３つの課題は関連したものである。

４　それぞれの改善点

以下では、上記であげた、３つの課題についての改善策を述べる。

４－１　広報

既に述べたように多くの団体が、効果的な広報手段を模索している。現時点では、新聞掲載、チラシ、会員へのダイレクトメールといった手段が一般的である。

効果的な広報を行う対策としては、プログラム（ツアー）ごとで対象とするターゲットと自団体のキャパシティを明確にする。どれだけの規模で広報を行うのかを考え、ターゲットに対して情報を届けるのに効果的な手段を検討する必要がある。広報規模と情報を届けたいターゲットが決まってくると、広報媒体、広報場所等が決まってくる。

しかし、効果的な広報手段を使って行くには一民間団体、個人ではなかなかできない部分もある。そのできない部分をアジェンダでサポートできないだろうか。

現在可能な広報手段としては、プログラム情報のアジェンダのホームページへの掲載、アジェンダ月刊誌への掲載などがある。

今すぐにとはいかないが、京エコロジーセンターが作成している広報ツール（GIS）との連携。具体的なターゲットを上げていうなら、ファミリー、子ども向けにプログラムを行う場合、アジェンダを通して、人づくり委員会の発行している「人づくりニュース」への掲載紙面の確保なども考えられる。

他地域での事例として石川県では行政が深く関わって、様々な団体のプログラムを集約して「石川自然学校」という冊子をつくっている。そこで、アジェンダでも各団体のプログラムを集約して定期的に「月刊　京のあじわいプログラム」というようなチラシを作成できないだろうか。その際、多くの人の合意形成の下で行っていくためにも、どういう基準でプログラムを集約していくのかの議論は必要だろう。

また、映像媒体を利用する手段も考えられる。京都市観光協会では京都観光普及の戦略の一つとして京都観光紹介の CD-ROM を全国に配布している。京都市の策定している京都市観光振興推進計画～おこしやすプラン２１～（資料２）との連動で考えてみるならば、IT 活用によるきめ細かい観光情報の提供として上記のようなプログラムを広くアピールしていってもいいのではないだろうか。

４－２　経営基盤

上述の課題で述べたように、経営基盤を確立するには採算の合うプログラム実施を行う必要がある。団体によって自主的なボランティア活動、生業として行っていこうとしているなど形態の違いはあるものの活動を継続的に行っていくには少なくともコストに見合うだけの参加費を設定する必要がある。もし団体として、今以上のプログラムの質の向上、広報手段の拡大、人材養成等を考えていくとすると、それにかかるコストも考えた価格設定を行っていくことが必要である。

現状ではこういったコストも考慮に入れた価格設定はほとんど行われていない。こういったコストを含んだ上での価格設定を行うとすると参加費は跳ね上がってしまい、参加する人が減少する。そうするとかかったコストの回収も危ぶまれるため、なかなか正当な価格設定が行えない。

しかし、正当な価格設定が行えないということは、今以上のプログラムの質の向上、広報手段の拡大、人材養成等を団体独自で行っていくことが困難になってくる。もし正当な価格設定ができないままに、広く PR し質の高い活動を続けて行こうとするのであれば、所属するスタッフに多大な時間を自主的なボランティアとして関わってもらうことが必要になってくる。

今回の調査の結果、まず重要なことは、「京都の魅力を発信したい」という思いをもった人たちが余裕をもって、継続的に関われる体制を築いていくことである。そのためには各団体、個人は自身をもって提供できるプログラムを考え、適正な価格設定での実施体制を整えていく必要がある。それと平行して、京都市は、エコツーリズムをまちづくりそのものとして考えた環境づくりを行っていくことが求められる。

そして、都市全体としてエコツーリズムを国内外は元より、市民へと PR していくことが必要である。その際には、継続的な取組みとして推進できるようにするためにも、人材養成にも力を入れていくべきである。そうすることで、エコツーリズムの認知度を高め、観光客、市民をほんもの志向へ導くことができるのではないだろうか。

京都でのエコツーリズムを推進していくには、それをに担う人を育て、育った人たちが活動できる体制をしっかり整えていくことが必要である。

４－３　人づくり

上述のように、エコツーリズム推進において人材はかなめである。調査の結果、人材確保に関しての課題は組織の運営スタッフの不足、登録メンバーは多いがプログラム当日のスタッフの不足、活動運営のための後継者の不在など人材不足に関するものである。特に、上記のような様々なテーマで京都の魅力を発信していく活動においては、素材の魅力を効果的に引き出し、わかりやすく伝える技術（資料２　インタープリテーション技術）をもった人材がいることが望ましい。

訪問した団体の中には、自然の魅力を面白く伝えることができる人、京都の歴史にかんする深い知識をもった人、日本文化を魅力的に伝えることができる人、企業の取組み紹介することができる人などいろいろな人がいた。これらの人たちは、市民の立場や事業者の立場からそれぞれに京都の魅力を独自のやり方で伝えている。

何度も言うように上記のプログラムやツアーはどれも京都の魅力的な資源を人の手によって守り、伝えている活動である。

しかしほとんどの場合、今いる人がいなくなると活動そのものが止まってしまうのが現状である。次世代を担っていく人づくりを行っていくことは急務であると考える。

5　将来のイメージ

以下では、実践交流会プロジェクトが目指すべき方向性を提案する。

5－1　市民参加によるエコツーリズムビジョン形成

これまで 3 年間、エコツーリズムワーキンググループ（以下エコツーWG）では京都市のエコツーリズム推進のための取組みを行ってきた。エコツーリズム推進の理念の下、宿泊施設のエコ化、エコツアーの普及のためにエコツーWG 運営メンバーを中心にエコツーリズムに関するセミナー、シンポジウムを行ってきた。

しかし、今回の調査からは実践交流団体においては、まだまだエコツーリズムの理念は共有できていないことが判明した。エコツーリズム、エコツアーという言葉の認知度は高いものの、具体的な中味の共有化がまだまだなされていない。京都市が策定している京都市基本計画においてエコツーリズムの推進（京都市基本計画　P96）はビジョンとして掲げているものの具体的な中身は考えられていない。エコツーリズム推進における具体的な中味の議論は当フォーラムエコツーWG が担っているわけである。

当フォーラムの意義は、市民、行政、事業者のパートナーシップにより、まちづくりの具体的な取組みを推進することにある。そこで、エコツーリズム推進を行うにあたって、京都市環境局、観光セクション、エコツーWG 運営メンバー、実践交流団体、関心のある市民とともに京都市におけるエコツーリズムのビジョンにつてい議論していく必要があるのではないだろうか。

京都のような様々な資源（自然、歴史、文化、人）を素材として活かしていくまちづくりと密接に結びついたエコツーリズムの推進においては都市としてのビジョンのないままに取組みを進めていくのは困難である。多くの人とビジョンを共有していく過程は多大な時間と労力をようするだろう。

しかし、その過程を経ることで京都市におけるエコツーリズムがこれまでのマスツーリズムとは一線を画して市民生活とより良い関係で結びついたものとして成り立たせることができるのではないだろうか。

そこでまずは、実際に地域資源を活かした取組みを行っている実践交流会メンバーを核として京都市におけるエコツーリズムビジョンの土台を築いていくことからはじめてみてはどうだろうか。なぜ実践交流会メンバーを核とするのか。それは実践交流会プロジェクトの目的には、エコツーリズムとしての取組みの延長線上にあると思われる地域の資源を活かして活動している団体、個人のネットワーク化、それらの取組みが、コミュニティ・ビジネス（まちづくりと密接に結びついた生業）として成り立つのかという可能性への挑戦だからである。

つまり、エコツーリズムを理論的に考えていく学者や研究者側からのアプローチも必要であるが、エコツーリズムの推進おいて、実際に京都の魅力を求めてくる人たちと現場でふれあっている人たちの生の声が大切だと考えるからである。実際の現場の声と、理論的な枠組みを近づけていくことによって、京都ならではのエコツーリズム

の理想の形態が見出せるのではないだろうか。

５－２　定期的なプログラムの実施体制づくり

前節ではエコツーリズムビジョンの形成について述べた。今節では、近い将来の理想のエコツーリズムの実施体制について考えてみる。

今回の調査の結果、実に様々な方法で京都の魅力を独自のやり方で発信している方々に出会うことができた。「自分たちの住む京都が好き、京都が持つ様々な魅力をいろんな人に伝えたい」と、形態は自発的なボランティア活動であったり、生業としてやっていこうとしている方など様々だ。

しかし、そこに共通しているのは自分たちの住む町が好きで、その町をもっとよく知って、楽しみ方をいろんな人と共有していきたいという思いのように感じられた。

近い将来、こういった人たちの活動が定期的に観光客や地域の人へと届けられる体制が整えられれば理想的である。市民へ向けてのアピールという面では、地域の環境保全活動を支援するということでエコロジーセンターの関わりは重要だ。

また市民でない人、いわゆる観光客へ向けては、市の観光局の支援のもと広くアピールをしていくべきである。

６　今後の提案

今章では、今後のエコツーリズム推進のために実践交流会プロジェクトをどのように推進していくべきかを考えてみる。

６－１　実践交流会タスクチームの編成

これまでエコツーリズムワーキンググループでは 3 回の実践交流会を行い、その度、数団体の方々の出席がある。

しかし、出席している団体、個人でも、なぜ実践交流会ということで、開いているのかをはっきり認識している方は少ないように感じられる。上述したように、実践交流会プロジェクトの目的は、エコツーリズムとしての取組みの延長線上にあると思われる地域の資源を活かして活動している団体、個人のネットワーク化、それらの取組みが、コミュニティ・ビジネス（まちづくりと密接に結びついた生業）として成り立つのかという可能性への挑戦でもある。もちろん、生業とせず自主的なボランティア活動として継続的に活動を実施していくことはなんら問題ない。

そこで、上記のような目的を共有した上で、具体的にどのような取組みを行っていけばよいかを考えていく数人のチームを編成したい。実践団体、個人がそれぞれに意見を出し合うことで、実践交流会プロジェクトを互いにメリットのある取組みとして実施していく体制を築くためである。

まずは、実践交流団体の方々にこれからの京都観光を担っていく可能性がることをしっかり伝え、思いを共有化していく作業が必要だろう。